

## 蓄音機の吹込を見る記

十月二十四日火曜日、かねて頼み置きたる三光堂の蓄音機吹込の實況を見る。或は家庭の娛樂に或は店頭 of 廣告に俗人の耳になれたるあの聲はそもいかにして記さるゝか。

案内されて入れば階上の一室方丈とやいはん狭苦しきこと限りなし、室の一方に幅二尺許の板敷を残して高さ三尺許の臺あり、今しも三味に合はせて浪花節か何かを唸り居る様怪しくも可笑し。室に入る前案内の店員我等に告げて言ふやう、可笑しくとも何卒御笑ひ下さるな少しの御聲もレコードに残り候と。室の内暗けれど眼少しく慣れてよく見れば、浪花節かたりは「あばた」の男にて、斑白の天神鬚いとふさはし。三味をひけるは盲目の女なり、年頃四十にもやあらん、折々エオー、ヒヨーと黄色い聲もて拍子を取るに、一同笑をのんで謹聴し居たり。各大喇叭の前に座りて演ずる後より十五六の娘が團扇もて二人を煽ぎ居たり、いかなる人の子にやあらん。

一回終るを待ちて隣の室に入れば、前に見たる大喇叭が壁を貫ぬきてこの室に入り、その端に振動膜を装へたり。

膜より出でたる錐の光端もてその下に回轉する蠟の

圓板に振動を記すこと普通の蓄音機に見るが如し。蠟の板は厚さ一時もあらんか軟かにせざれば振動の充分に深く刻まれざる由にて、この機械室には石油ストーブを燃きたれば、盛夏三伏の暑さに技師は上着をぬぎて働き居たり、其の人の話に若し誤りて冷たき風のこの室に入り來ることあれば、蠟板立所に割れて廢物となるといへり。

かくして一旦聲の振動波形を刻みたる蠟板は之を電槽に入れ、銅メッキをなして凹凸反對なる銅版を作り、印刷術に於けると同様にして之より幾枚も同じレコードを作るものなりとぞ〔以下略す〕講演者に代りて之を〔記す〕

## 論 說

## 國字改良と横書との關係を論ず

理科會部長 乙 部 孝 吉

現在の若き國民が漢字を學ぶために無益に腦力を費しつゝあることは、識者の間に既に定論あり、今更之を説く必要なが如しと雖、一見不可思議に堪へざる事實は、世の實際國民教育にあたる人々が、如何にして生徒に漢字を學ばしむべきかといふことに就て苦心しつゝあ



るに關らず、如何にして之を捨つべきかといふことは毫も之を考へざるにあり。謹て世の國民教育を掌らるゝ諸君に告ぐ、諸君が努力してあらゆる方法を講じ給ふに關らず、次第に漢字を知らぬ國民の増し行くは明かなる事實なり。

然れども我國の教育そのものは年々進歩しつつあることは諸君にも異論なかるべし。されば事實によりて判斷するに漢字は學ぶに適せざるものにはあらざるか。學ぶに適せざるものならば、何ぞ速かに之を廢止せざる。之を廢して須くローマ字を採用すべし。或人は例を取りてこの論に反對して謂ふやう、春宵一刻値千金とか、細雨如絲とかいふやうなることは、ローマ字にては表はし得ざるべし、これ多くの人がローマ字採用に躊躇する所以なりと。然れどもこは憂ふるに足らず。吾人は決して漢字の一つ一つに表はるゝ意味をローマ字に表はさんとするにあらず、ローマ字を以て日本語としての漢字の音のみを寫さんとするなり。成る程ローマ字にて細雨如絲と音丈けを表はさば漢字の如く意味深長にはあらざるべし。然れども若し強てかゝることを求むるならば、細雨如絲の深長なる意味を説明したる字引を作らんのみ。故事可なり熟語可なり更に進みては古典可なり語源可なり、必要に應じて之を一部の辭典に集む

る豈に難事と謂はんや。

國語調査會が幾度調査を重ねるも、世の中の人特に實際の教育者が此の事に就いて冷淡なる間は、所謂調査調査と稱して實行には尙前途遼遠なるべし。國字改良の問題は随分古き懸案なれども、現在世の中の氣運が果して改良實施の域に進まざるか。果して然らば此の氣運を高め之れを Accelerate するは、實際國民教育にあたる人々の任なり。彼等は勿論與へられたる使命に向て、全力を注ぎつつあるとは、誤りなき事實ならん。然れども是れ現在の國字を用ひての限りある努力なるを如何せん。現在の漢字交りの國字を廢して、全部ローマ字を以てすれば、如何に有効に兒童の腦力と時間とを用ひ得るかは未だ實驗したるものあるを聞かず。世の所謂教育家諸君は何故にこの點に關して怯懦なるか又冷淡なるか。苟も我國の將來を憂ふるものは現在の國字を改良せずして可ならんや。教育の目的は國家にても個人にても、凡て現在よりも一層より良きものたらしむるにあるべし。

進歩のためには何者をも突破して可なり。特に文字の如きは言語の姿なり、之を表はすに漢字を以てするとローマ字を以てするとは、たゞ便宜なるもの習ひ易きもの文化の進歩に適するものといふことを標準として可



ならんのみ。漢字廢止は説かずして可なり。事實に於て漢字の國は皆既に滅びたり。漢字も日々實社會より亡びつゝあり。何となれば漢字は文化の進歩に適せざる文字なればなり。小學校の先生が如何に努力せられても、文部省が何と言ふても、漢字を知らぬ兒童の増し行くは、反面に於て以上の事實を證するものにはあらざるか。茲に於てか吾人は將來の我國の常用文字としては、ローマ字を措いて他に適當なるものなしと斷言して憚らざるものなり。之を採用して日本語の音を寫すは、ローマ字を用ふる西洋諸國と交際し競争し、文化の優勝者たるべき唯一の手段なり。漢字は之を用ひて列國との競争に堪へざるを如何せん。

期する所は文字を愛して日本語を愛せざる頑迷論者の死滅を待たんのみ。時來らん然りローマ字を以て日本語を綴るべき時は來らん、必ずしも我等の存生中と謂はず。或は西洋の人に迫られて然ること維新前の開國の如きものなくんば幸のみ。記臆せよ漢字假名は無くとも、日本民族の絶えざる限り日本語は存在し得るを。日本語は我等の精神なり血なり本體なり文字は其の姿のみ、洋服を着たるがために心まで西洋人になつた話は未だ嘗てこれを聽かず。

然れども予は個人として世の所謂ローマ字論者の唱

ふる所、又實行する所に對しては、一々賛成し難きものあり。其の一は彼等が

### 實行の端緒を求むる

に於て極めて疎きことなり。眞に「ローマ」字を用ふるより外に國字改良の道なしと信ずるならば、何故に民衆をして之を實行せしむる端緒を開かざるか。端緒とは如何。曰く從來の縦書を悉く横書に改むること是なり。前號に述べたる如く縦書は漢字漢文の特色にして、横書ローマ字の特色なり。

又「ローマ」字の精神は横書にあり。歐米の文化の精神は横書にあり。凡ての自然の進歩といふことに適應したる書き方は、横書を措いて他に之なきは前回に詳しく述べたるが如し。さればローマ字を採用する第一歩は、現在の縦書を悉く横書に改むるにあり。この一事！この一事！之を勵行せずして「ローマ」字「ローマ」字とその効能ばかりを説き立てて何かあらん。又、自身日常縦書を採用しながら、ローマ字採用を主張するが如きは、所信を貫ぬくに不忠實なるものと謂ふべし。一片の手紙なりとも、なるべく世の中の人目に多く横書を觸れしむるは、横書の氣運を高むる有効なる一つの手段にあらずや。誰か横書を至難と謂ふか。



若し果してその事あらば、それは習慣れざるがためのみ。煙草に中毒したる者は煙を吹かざれば却つて不愉快に感ずるが如し。あゝ是れ惡習の惰性のみ。その人若し一旦横書に慣るるときは縦書より以上便利なるを知らん。試みに文字を書くことを知らぬ幼兒に「ペンシル」と白紙とを與へよ。彼は縦よりも横に多くの線を描くにあらずや。人の眼も頭も手も、之を縦に動かすより横に動かすことの容易なるは、人の氣付かぬ天性なるを如何せん。見よ現在の我國の教育ある國民が、次第に横書に移りつゝあるは、蔽ふべからざる事實にあらずや。

世の中に漢字を忘るる人間の多くなると同時に、老人の所謂横文字が次第に多くの人の目に觸るるやうになることも確かなる事實なり。學校が之を強制せざるも、若き國民の多數が横文字の讀めぬを耻とする世の中となりつゝあることも確かなる事實なり。この點より見るときは、科學上の記載に於て何も彼も漢字に譯さねば我物にならぬやう思ふ人あるは愚の至りなり。譯語の如きは原語の意味を充分に表はし得ざるのみならず、漢字のための誤解と不要の意味とを伴ふ虞あり。結局不要となる漢字の譯などは、今日の程度にてなるべく押へて増さぬ工夫を要す。我物顔に勝手な譯語を用ふる人は得意ならんも、子孫後昆の之によりて迷惑するもの

幾億人なるやを知らず。其の罪將に誅すべし。

但古典の一部として漢字漢文を研究することは甚だ必要なり。たゞ日本の常用文字として之に執着するは時代の趨勢を知らぬ妄者のみ。

漢字は速かに之を廢止すべし。廢止すべき手段としては先づ現在の日本文は凡て之を横書にすべし。調査の時代は既に過ぎたり。今や實行の端緒を開くべき時は來れり。是れローマ字を用ふる列強と交際する我國の上に當然來るべき氣運なり。世の中に漢字を忘るる人の多くなることは、漢字なしですむ世の中となりつゝあることを示すものにあらずや。事實より確かなるはなし、必要なものを忘るるは自然の性なり。この見易き道理を眼前に控えながら、調査調査とはさても氣の長い話にあらずや。當局速かに一片の法令を發し、今日より以後諸官衛の公文書は勿論全國の大中小學校の教科書は凡て横書にすべし、又國民は凡て横書を勵行すべし、之を犯すものは刑罰を加ふといふに至らば、ローマ字は自ら行はれん。何となれば漢字はローマ字よりも横書に適せざるが故なり。又一旦横書にすれば、ローマ字に移ることは、多大の勞苦なしに出來得べきこと明らかなればなり。

こゝに至りて吾人は往時のフランス政府の英斷に想



ひ到らざるを得ず。諸君は果して御承知なるか。フランス政府がメートル法を実施せんとするや、法令を以て他の度量衡の使用を禁じ、之に犯すものは刑罰を加へたりといふ。

かくしてメートル法は行はれたり。かくして始めてローマ字も亦行はれんか。

### 物理学の原則

に照らして考ふるに、物體は動き易き方向に押して初めて動き出すものなり。換言すれば力を加へたる方向に運動の加速度を生ずるものなり。横に動き易きものは須く之を横に押すべし、日常縦に文章を書いて居ながらローマ字ローマ字といふは恰かも横にのみ動くものを縦に押して中々動かぬといふが如し。少しく方角違ひとや申すべき。されば一面にはローマ字にて文章を書いて凡俗に示し、一面にはその効能を説き立つること、所謂世間のローマ字論者の如くすること勿論必要ならん。

然れども世人にローマ字を採用せしむる唯一の手段として、先づ彼等をして横書に慣れしむるは焦眉の急務なりと信ず。現在の漢字交り文に横書を勵行せずしてローマ字採用を云々するは實行に疎きものといふべし。

再言すローマ字採用を措いて國字改良の途なきは明

らかなる事實にして、ローマ字を以て日本文を綴るべき時代は早晚來らん。然り横書の時代と共に來らん。當局何ぞ速かに法令を發して横書を斷行せざる。心命を賭して之にあたる文相はなきか。

注意。上文を讀まれたる人は予を以てローマ字採用を主張する過劇論者とせらるるならんも、予は現在我國の一部に行はるるが如きローマ字の書き方は餘り好まぬ者なり。何となれば之を讀んでその文章の口調といひ文法上の形式といひ眞の日本語にあらざる點あればなり。理窟は兎も角難澁奇怪の感を與ふる綴り方は予の好まざる所なり。我等の日常用ふる日本語として最も美はしき點は何時までも尊重せざるべからず、保存せざるべからず。ローマ字は單にこの歴史ある日本語を寫す一つの道具なり。この點より見るときは、深く内外の文學に通じたる國語學者言語學者を中心として進むにあらざれば、ローマ字綴りの文章の廣く用ひらるるは尙前途遼遠なりと謂ふべし。況んや綴り方を制定するが如きはこれ實に大事業なり、一人の力にて企て及ぶべきことにあらず。又現在の方法に相應の理窟はありとも之を以て世間後世を風靡せんとすれば、世人をして厭惡の念を起さしむるのみ、却てローマ字採用の氣運を「レタード」することなきか。世間にローマ字論者の多くなる



ことは必ずしも現在の綴り方が好きなるためにはあらで、單に我國がローマ字を必要とする時代に近づきつゝあるがためにはあらざるか。

顧ふに今日の日本の現狀に最も適切なることはローマ字採用の主張よりも、そは早晩來るべき豫定の事實として、之に移るに必要な横書を主張することなりと信ず。綴り方の如きは之を後世の人に托して可なり。たゞこの當然來るべき氣運を看取せざるが如き人の爲めに詭辯の謗を招く虞あるに關らず論ずること以上の如し。

### 英 文 警 句 (其の一)

“When you can measure what you are speaking about, and express it in numbers, you know something about it; but when you cannot measure it, and when you cannot express it in numbers, your knowledge is of a meagre and unsatisfactory kind” (Lord Kelvin)

“The student of mathematics is accustomed to a chain of deduction where each link hangs upon the preceding; and thus he learns continuity of attention and coherency of thought (Dr. Whewell).

某女生徒保證人の家に來りて『どうも近頃は數學の宿題が一度に20題も出る、又試験のときに先生は一度もや

つたことのない問題を出されるから困る』と成る程、この人は公式に數を代入するのみを數學の練習と心得たるかねぼけて讀んでも解るものは新聞の三面記事ばかり、さういふ人は數學をやつても計算をする活きた器械に過ぎないであらう。女學校は女工を養成する所にあらず、自分で考へて問題を解くやうな頭の練習を積む爲めではないか。又某女學校の生徒恐る恐る進み出で、受持の教諭に伺ふやう『先生幾何といふものは何ののために習ひするもので御座いませうか』と。

これ實によくこの年頃の女性の心情を穿ち得て妙なりといふべし。

讀者よ諸君は Kelvin 卿の語を聽かれたるか。

諸君が自ら述べらるる事柄について何か測定をしてその結果を數で表はし得らるゝならば——(例へば何倍重いか何パーセントであるとかいふやうに)諸君の智識が確實である——と謂へる；然るに若し數で表はして話しをすることが出來ないやうな事柄はそれに對する諸君の智識が尙不十分な點があるに違ひなとい。

數學物理化學を Exact Science と呼ぶことある理由又凡ての科學が此處に根底を置かねばならぬ理由が解るでせう。